

# 末黒野

すぐるの

10月号 (通巻854号)



# プ ー ル

力瘤また一つ増え雲の峰  
児の泣くこゑ児を叱る声早梅雨  
六尺の大向日葵を畏れけり  
若者ら夏を弾けて由比ヶ浜  
姫女苑歩けば腰に来る疲れ  
炎天や雲の溶けゆくみなと街  
月さして鋼びかりのプールかな  
帚木に影の生まるる夜明けかな  
潮風や島に根付きて浜万年青  
心太方便の嘘少し言ひ  
白南風やでんと軍艦自衛艦  
夏の夜や昼の怠惰をひきずりて

松本三千夫

# 蛭狩

くちなしの白き香こぼす闇夜かな  
かたはらに誰かきてをり蛭狩  
隠沼や葭切の原どこまでも  
大いなる夕虹かけて畦の道  
海を見て飽かずにをりぬ海紅豆  
裏山の暗さほぐるる祭笛  
峡の日の淡きに目覚め未草  
黒揚羽広き台地をゆるゆると  
禅刹の薄闇に馴れ青葉木菟  
駒鳥やいよよ青透く山上湖  
天国を踏み外したる昼寝覚め  
禅寺の見えぬ手入れの跡や涼

黒滝志麻子

(副主宰)

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 黒揚羽

安齋久英

湖へ二キロの標緑さす  
夕虹をくぐりタンカー沖を指す  
噴水の穂先佳境に昼の月  
こめかみをついと掠めぬ黒揚羽  
梅雨の鳶杭一本に身を委ね  
斥候か見張りか梅雨の鴉二羽  
マンションの壁よりぬつと雲の峰  
些事大事思ひ巡らせ明け易き  
手の平に掬ふ色なき清水かな  
白南風や汽水に波の競り合へる

## 梅雨の牛舎

石黒興平

プランター仕立のトマト艶やかに  
緑さす帝釈天の門入れれば  
団子屋の昭和のにほひ麻暖簾  
寅雪駄さくらサンダル像の夏  
間延びせる鳴声梅雨の牛舎より  
さらに闇深め蛍の舞ひにけり  
寂色を見せざる娑羅の落花かな  
紳士用日傘の紳士端然と  
無垢にして孤高の色を白菖蒲  
風絶ゆる京の暮色や川床灯り



# 妻病む

田中臥石

水無月の安房鴨川や真沙女句碑  
ビートルズの曲流れをり水着店  
短夜の妻発症の声囁らす  
合歓の花見て嘆声の往診医  
癌などに妻負けるなど墓のこゑ  
梔子の花のやうなる女医来たる  
八十の光陰虹を見て思ふ  
紫陽花や五百阿羅漢影を置き  
阿羅漢の一尊梅雨の空睨む  
緑蔭や辛夷の青き実を握り

# 白菖蒲

森清堯

ポケットの中身は変へず更衣  
ゆりの木の花をかかぐる高さかな  
ふはり寄りこつと消えたり恋螢  
駅頭の標や鉢の花菖蒲  
たそがれてなほ際やかや白菖蒲  
ととのふる明日の紫紺や七変化  
肩の荷を一つ下ろせり啜る枇杷  
蟻の列しんがりの児の賜みをり  
草笛や息の加減のすぐ戻り  
身の丈とひとり居の母茄子の花

# 河鹿笛

森清信子

水に馴れ風に馴れたる植田かな  
麦秋や棚田虚空へ展けをり  
重さうなる雲のみすわり桐の花  
月を呑む雲の迅さや河鹿笛  
風抜くる高さ泰山木の花  
溪谷の荒き岩肌夏つばめ  
青葉山人を入れては人を染め  
湧く雲と流るる雲や梅雨の月  
防ぐ岩せめぐ溪流梅雨晴間  
滴りや迫り出す岩の屋根めける



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



水中花

岡田史方

水音と風音と和す植田かな  
暫くを考えてをりかたつむり  
一日を微恙かこつや水中花  
明日開くひらくと風の蓮かな  
山よりの湿りまとひぬ岩たばこ  
くぐりたる茅の輪の青さ身ほとりに  
葛切や話のつぎほ探しをり

夏の夜

今村千年

スマホ触る指の湿りや梅雨に入る  
鬱鬱と鬱の字のごと梅雨に入る  
ほろ酔ひて風雅のこころ夏の夜  
ほととぎす鎮守の杜を統べてをり  
夕焼けを描く吾妹子夕焼けて  
大山に雲湧き起きぬ冷奴  
滾滾と富士の湧き水冷素麵

蛍

岡野里子

出迎へのやうにふんはり初蛍  
点滅は蛍の吐息草の蔭  
ぬばたまの闇や蛍の在り所  
蛍火や濁世の闇を遠くせり  
玉解きて風の芭蕉となりにけり  
水音やはけの小径の濃紫陽花  
古池や水かげろふの青楓

戦友 小田嶋野笛

薔薇剪られ出窓の多き異人館  
会うて疲れ別れて疲れ単衣帯  
レイと名付く我が戦友の冷蔵庫  
竹伐や近江丹波の白袴  
まぼろしの鞍馬天狗や竹伐会  
芭蕉布や蛇皮線の音の五音階  
嫌はれてゐるとも知らぬ蛾や自在

蓴菜汁 加藤静江

溪谷の古民家の宿蓴汁  
大水車苔茂らせてゆつたりと  
花苔の光る雫や大水車  
万緑や山家の宿の深庇  
荒梅雨や幣の張りつく路地稲荷  
大池を占むる睡蓮黄の眩し  
青葉闇思はぬ近さ電車行く

夕河鹿 菅野日出子

夏安居や雨の寺苑の黙深き  
サスペンスの筋見えてより新茶汲む  
一服の抹茶に憩ふ泉殿  
あぢさゐの藍ひと色や寺の坂  
緑蔭の細き疏水や太宰の忌  
溪谷を眼下のホテル夕河鹿  
閑散と夜の仲見世や梅雨の隙

釣忍 斉藤マキ子

マンションの軒端短し釣忍  
病む夫に合はすくらしや胡瓜もみ  
村分かつ高速道や青田風  
簾吊り程よき暗さ生まれけり  
翡翠の切り裂く水の暮色かな  
日盛や窓拭く人の命綱  
若葉風象舎を洗ふ水しぶき

# 青炎集

## 松本三千夫選

大網白里 鈴木礼子

横浜 梅田 武

空港を出でて蒼天花でい

**梅雨明の青き摩文仁や慰霊の日**

風鈴を拭ひて音色新たなり

さくらんぼ里の日に照り風に照り

割箸の角を頼りや心太

虹消えて腕白まぶた擦りけり

横浜 山口 登

片陰に列乱しつつバスを待つ

紫は高貴な色よ茄子の花

無住寺の賽銭箱の落し文

**直線を曲線で飛ば揚羽蝶**

首振りを試し出番の扇風機

梅雨晴やたんきり飴を刻む音

横浜 佐藤喬風

吹抜けの居間やごろ寝の簾

**幼子と描く絵書き歌夕涼み**

薬草の擬ひの殖ゆる神輿草

山桃を挽ぐや好漢指染めて

掘深き樹林を雄飛黒揚羽

待ち合はす辻や落花の夏椿

**世迷言風の畳めり夏座敷**

椰子の葉を目深に被り三尺寝

池の面の己に怯む羽抜鶏

嘘泣きのはたと止む児や日雷

語部の流す涙や夏炉炊く

水あふるる田毎の月や草蚩

横浜 正谷民夫

阿蘇五岳次つぎ暮れて麦匂ふ

十葉の白く匂へる小暗がり

**太宰忌や梅雨蝶二つ纏れぬて**

摩天楼の玻璃上りゆく梅雨の月

殺し場に抛る御捻り夏芝居

山蟻の寄らば咬まむと頭振る

柏 湊田 則子

碑の何と読むやらねぢれ花

無毒だと言はれてもなほ蛇嫌ひ

蛇の目傘欲しき小雨のあやめ園

大絵馬の鬼面のかすれ梅雨の寺

干し物のバベルの塔や梅雨しとど

**梅雨明や鬱の字ぱつとばらり散り**

横 浜 原 和 三

大寺の萱目映し梅雨晴間

去りがたし古民家園の夏座敷

万緑の懐ふかき故郷かな

ふるさとの薬味たつぷり冷奴

移ろへる日日いとほしや七変化

**築地塀へ影の揺れをり夏柳**

横 浜 磯 部 愛 子

新茶汲み夫婦茶碗にて供へ

重たげなる紫陽花ずらり線路際

更衣卒寿となるも軽やかに

十薬てふよき名の花やはびこれる

疾く来ませ形よき茄子の馬二頭

**十余年の俳誌末黒野土用干**

新宿 稲垣 佳子

酒蔵の酒樽乾き夏燕

でで虫の触角たたき雨しづく

朝顔の行灯づくりとの曇り

真青なる鬼灯風の湿りたる

**咲き初むる山あぢさゐや無垢の色**

延べ段の程よき湿り金糸梅

横 浜 占 部 美 弥 子

古里や水湧く池の山椒魚

風鈴の音色亡き母いざなふか

雅名や白き菖蒲に時忘れ

夕さりの青田の風に浸りけり

東慶寺一隅灯す半夏生

**凌霄花散りたる道や朝日差し**

横 浜 小 倉 純

時に跳び水面自在や水馬

翡翠の翔ぶや一瞬彩残し

枝撓る己が重みや青胡桃

鯉の顎はつれるほどや夏の川

揚梅の落ちたる道や人の避け

隠沼の水のにごりや早梅雨

# 耕 土 集

## 黒滝志麻子選

新瀧 太田チエ子

夏の夜の車内明るき回送車  
長き貨車涼しき風を引きにけり  
六月の風を見てある展望台  
堤防に人の集まる梅雨出水  
横向きの鉄砲百合を供花とせり

横浜 宮崎他異雅

高層へ競ひて復習ふ燕の子  
葉降るや心臓辿るカテーテル  
梅雨明の中空翹ふアドバルーン  
街明かり夜半の薄暑を喘ぐかに  
銀ぶらやあみだかぶりの夏帽子

三郷 中谷 未知

俳風は如何にと尋ぬ梅雨の席  
待ち人も雨も未だなり梅雨曇  
配られし団扇で捌く縄暖簾  
悲話秘むる七里が浜や大南風  
空梅雨の帳尻合はず豪雨かな

横浜 長谷川はまゆう

ひと杓の水音清し絹の衣  
半円の深紅の夏日沖に落つ  
塔に消ゆる光のかげら遠火花  
長談義中入りにして西瓜切る  
骨切りの身の反り返る鱧の椀

横浜 大塚かずよ

いつもの席に美人女将や五月場所  
日焼けせる車夫駆け抜くる大路かな  
サーファーへ大波崩れボード舞ふ  
風薫るアツサムの香のカフエテラス  
小さき手をぎゅつと引き寄せ祭の夜

横浜 峰 幸子

水玉のリボンに替へて夏帽子  
蟻の列辿りたどりてこぼれ菓子  
片蔭の広がる道の立話  
白檀の扇子の風や幕上がる  
半分は本音の話冷やつこ

横浜 加藤 タミ

睡蓮や天使栖むかに花ひらく  
夏の屋フランスパンとラタトゥイユ  
水中花褪せたる色の喫茶店  
びゅんびゅんと子ら振り回す山棟蛇  
風鈴へ委ぬる手足ひと休み

海豚シヨ一

小川 玉泉

(名誉顧問)

ぴちぴちと生け簀に跳ぬるをとり鮎  
釘一本使はぬ木橋河鹿の瀬  
夜の帳降りて賑はふ河鹿の瀬  
梅雨の冷え忘れて興ず海豚シヨ一  
梅雨夕焼け声はづまする軒雀  
参道を染むる山桃峰の寺

雑記帳 3

江の島を正面に見て、片瀬西浜海岸に江の島水族館がある。二十年振りに家族で訪れた。お目当ては海豚の曲芸である。飼育員との見事なやり取に、梅雨の冷えを忘れた一時であった。